

氏 名	そ う だ な お き 左 右 田 直 規
学位(専攻分野)	博 士 (地域研究)
学 位 記 番 号	論 地 博 第 6 号
学位授与の日付	平 成 20 年 1 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	Indigenizing Colonial Knowledge : The Formation of Pan-Malay Identity in British Malaya (植民地的知の土着化 —— 英領マラヤにおける汎マレー・アイデンティティの形成 ——)
論文調査委員	(主 査) 教 授 玉 田 芳 史 准教授 小 泉 順 子 准教授 石 川 登

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、マレーシアのナショナリズムに関連して、汎マレー・アイデンティティ（マレー諸島の「マレー系」先住民が一体であるとの民族意識）の来歴を、英領マラヤにおける植民地的知（植民地世界に関して植民地支配者が創り上げた知識の総体）の土着化という観点から考察したものである。考察の焦点は、マレー語学校や師範学校における歴史・地理教育の中で示されたマレー世界像と、スルタン・イドリス師範学校（SITC）出身のマレー民族運動指導者で青年マレー連盟の会長だったイブラヒム・ハジ・ヤーコブ（1911～1979）の汎マレー主義（マレー諸島の「マレー系」住民の政治統合を志向する民族主義）との間の関連を明らかにすることにおかれている。

第1章は、植民地的知に対する在地の住民による主体的な受容と流用の過程を解明することが本論文の狙いであると説明する。

第2章は、英領マラヤにおけるマレー語学校教育の歴史的背景を明らかにしている。植民地政府がマレー語学校教育に期待した役割は、マレー人を「賢い農民」に育て上げることであり、師範学校はそれに必要な男性教員を養成するための教育機関だった、と論じている。

第3章は、戦前のマレー連邦州における唯一のマレー語師範学校SITCにおける教育の実践について検討を加えている。SITCは教員養成とともに、新しいマレー人知識人層の供給源でもあった。マレー世界（マレー諸島）に関する標準化された知識が伝達されたほか、出身地を異にする生徒たちが寄宿舎に暮らしながら学ぶ中でマレー人としての仲間意識を共有する機会となった。

第4章は、マレー語小学校やSITCで使われた歴史・地理教科書の内容を比較する。マレー世界にまつわる新たな共同体（民族）概念、空間（領域）概念、時間（歴史）概念がイギリス人歴史家による教科書（R・J・ウィルキンソンによる英語教科書とR・O・ウィンステッドによるマレー語教科書）からマレー人歴史家の手になる教科書（アブドゥル・ハディ・ハジ・ハサンによるマレー語教科書）へと伝達されていき、マレー世界像が徐々に標準化され、土着化されていったことを明らかにする。

第5章は、イブラヒムの思想形成と政治行動の軌跡を追いながら、彼のマレー世界像の特質と思想連鎖のあり方を検討している。イブラヒムは小学校やSITCで獲得したマレー世界に関わる共同体概念、空間概念、時間概念を受容しつつも、1930年代末になるとそれに改変や再編成を加えながら、自らが主張する汎マレー主義の正当化を行った、と論じている。

第6章は、戦後のマレーシア形成（1963年）に至るまでの汎マレー主義運動の展開を跡づけている。マラヤ連邦首相ラーマンらが旧英領による「マレーシア」構想を提唱したのに対して、イブラヒムの仲間たちは、「マレーシア」構想の植民地主義的性格を強く批判し、マラヤ、シンガポール、北部ボルネオと、インドネシア、フィリピンとの統合による「ムラユ・ラヤ（大マレー）」国家の形成を唱道した。両構想は、現実政治の場では激しく対立したが、共通点も多かったことを明らかにしている。

7章では結論が述べられる。イブラヒムのような現地の知識人・運動家が、植民地的知を利用することを通じて、植民地支配に抵抗し、なおかつ、植民地国家の境界の越境をも試みるような汎マレー主義を主張しえたのはなぜか。この逆説は、英領マラヤにおける植民地的知の土着化の過程は、イギリス人から新たな知識や認識枠組みが伝達されたという側面と、そうした外来の知が現地の知識人によって換骨奪胎され、別の目的のために流用されていったという2つの側面があるという視点から説明することができる。

論文審査の結果の要旨

本論文は、イギリス領マラヤの知識人のなかに汎マレー主義が登場してきた背景を実証的に解明している。

今日のマレーシアは半島部とボルネオ島北部の旧イギリス領から構成されている。しかし、このような形でひとつの国民国家を形成する必然性はなかった。半島部の英領は、3箇所の海峡植民地と9つのスルタン国から成り立っていた。他方、海を隔てたサバ、サラワク、ブルネイの3つの植民地ではそれぞれ別個の支配が行われていた。しかし1957年に、半島部が、海峡植民地の一部シンガポールだけを除いて、マラヤとして独立した。63年にはシンガポール、サバ、サラワクが加わってマレーシアとなり、65年のシンガポール離脱後、現在の版図となった。残るブルネイは84年に独立した。マレーシア、シンガポール、ブルネイという3つの国家としてではなく、もっと小さく分かれる可能性も、英領だけではなく今日のインドネシアやフィリピンにも及ぶもっと広大な地域が1つの国になる可能性もあった。

本論文は、マラヤ、続いてマレーシアという形で独立国家が誕生し、存続することが可能であった理由を植民地的知の土着化という観点から実証的に解明することに成功している。注視されるのは地理や歴史の教科書であり、師範学校である。教科書では、マレー人は混合民族であり、マレーの地理的な範囲が、イギリス支配の中心であった「マラヤTanah Melayu」(マレー半島)とともに、「マレー世界alam Melayu」(マレー諸島)と「マレー諸国negeri-negeri Melayu」(半島のスルタン諸国)の三層構造をなしていると記されていた。

師範学校の生徒は、必ずしもイギリス流の知をそのまま受容したわけではなかった。本論文は、マレー知識人の思想変遷を辿るために、汎マレー主義の代表的な主張者であったイブラヒム・ハジ・ヤーコブを取り上げ、彼の活動と著作を分析している。彼は三層構造をなしていたマレーの地理的な空間のうち、インドネシアやフィリピンも包み込む「マレー世界」を強調した。「マラヤ」という植民地国家の地理空間を踏襲しようとした多くのナショナリストとは対照的であった。この対照は、独立闘争において、既存の「国家」を優先するのか、想像すべき「国民」を優先するのか、という違いに起因していた。彼のマレー民族観はウィンステッド以来のイギリスの知に準拠しており、その意味ではイギリスの知を都合よく流用したことになる。

イブラヒムは権力闘争には敗北したものの、汎マレー主義は指示範囲が伸縮自在で使い勝手がよく、今日でも脈々と息づいている。一例をあげるならば、1990年代以後増えてきたインドネシアやフィリピンからの労働者の流入に対するマレーシア政府のアンビバレントな姿勢の底流には汎マレー主義があるように思われる。それゆえ、本論文は現代的な意義も大きい。

本論文はマレー語、英語、インドネシア語による文献を広く渉猟し、マレーシアのナショナリズムに関してまとめられた大変優れた研究であるばかりではなく、在地の住民が植民地的知を主体的に受容したり流用したりする過程の解明という応用可能性の高い視点の採用により比較研究を刺激している点も高く評価しうる。それに加えて、英語で書かれているのでマレーシア社会への知的還元的面において大きな意味を有し、また諸外国の研究者にも多大の知的貢献をなすものである。よって、本論文は博士(地域研究)の学位論文として価値あるものと認める。また、平成19年11月2日に、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。